

論文要旨

《テーマ》 終末期にある高齢者家族の看護に関する事例研究

スティグマの視点から

《背景》スティグマとはギリシャ語で奴隷や犯罪者であることの徴に体に刻まれる烙印、焼印を意味し、焼印は一度体に刻まれれば消えることのない汚名、不名誉の証である。事例対象者C氏は「高齢者は産業廃棄物」と病院で言われた。筆者はスティグマの概念を知らずに実践を行っていたが、スティグマの理論に出会い、C氏の体験をスティグマの視点から解釈し、行った介入について振り返り、介入の意味づけをしたいと考えた。

《事例研究の目的》老いて終末期を迎え、要介護状態になることに関連し、一個人が付与されたスティグマの体験を解釈し、行った介入をスティグマ低減のための介入の枠組みに沿って考察し、自らの実践を振り返る。また、高齢者が社会からスティグマを付与される背景について考察する。

《事例研究の方法》研究デザインは回顧的事例研究であり、事例の分析方法は、訪問看護記録、プロセスレコードから事例対象者のスティグマに関連する情報を抽出し、対象者のスティグマの体験を解釈し、Saylor, Yoder, Mann. (2002/2007) のスティグマへの対処、介入の記述に沿って、行った介入をスティグマの視点で考察する。

《結果》次女と長男と3人で暮らしている90歳台の男性、C氏は膀胱がんの終末期にあり、訪問看護師からケアを受けるとき、自らを「産廃」であるとおぼやき、極度に恥じらう様子が見られた。C氏は病院で不快な体験をしたことにより入院を拒否していたが、家族は入院での看取りを希望し、双方の意向は相違していた。訪問看護師はC氏に関心を向け、話しかけ、次女と協力し手際の良いケアを工夫することでC氏の気兼ねや恥じらいを緩和しようと試みた。C氏の看取りが近づくと、C氏の意向が無視されないように看取りの場について倫理的に検討のプロセスを踏み、入院での看取りを決定した。

《結論》行った介入をスティグマの対処・介入の枠組みで意味づけすることができ、次の示唆を得た。訪問看護師が高齢者と家族に働きかけ、相互にかかわり合うことで、信頼を得、支援者となることで、スティグマを感じる要介護高齢者の自己に対する態度を変え、スティグマを低減できる可能性がある。また、医師、看護師等の専門職は日ごろから病気や障害のある高齢者と向き合っているため、高齢者に対してネガティブなステレオタイプを持ちやすく、スティグマを付与する立場となる可能性があることを自覚し、高齢者個人の理解を深めることでステレオタイプから脱する必要がある。